

『撰集抄』読解の試み

——出典注記の問題 及び 卷二―一話「一和僧都 春日託宣」——

森 瀬 代士枝

はじめに

およそ『閑居友』を読み『撰集抄』に目を通すほどの読者ならば、この両書に共通してその名が見える『遊心集』という書物に関心を持つに違いない。

『閑居友』には一箇所、卷上第一〇話に、道希法師説話を載せる書物として『遊心集』の名があげられている。

『撰集抄』では卷九―六話に、「以往、『高僧伝』を見侍しに」(4890行) という前置きを伴って道希法師説話が記載されている。その説話に続く評論部末尾に「此こと、『遊心集』にもかたばかり載て侍りき」(4916―4917行)と出ている他、卷一―八話・卷二―一話・卷四―五話に『遊心集』という書名が見られる。

『閑居友』と『撰集抄』とは直接関係があり、『撰集抄』に『閑居友』からの影響が見られることは、現在認められているところである。

『遊心集』は、『閑居友』の側から左のように目されている。

「遊心集」は現在、佚書である。「本朝書籍目録」にその名は見えないが、「閑居友」には一箇所、「撰集抄」に四箇所、その書名と所載説話が引かれている。(略)：「発心集」「閑居友」「撰集抄」などに近い内容とスタイルをもった仏教説話集であつたと想像される。(美濃部重克 中世の文学『閑居友』解説 333-34頁)

未詳。佚書か。本話(『閑居友』巻上第一〇話道希法師説話)は源泉の大唐西域求法高僧伝とは相違点があり、引用の誤りでないとしたら、直接にはこの遊心集に拠つたとも考えられる。仏教説話集であろうか。(小島孝之 新日本古典文学大系『閑居友』脚註 384頁)

本稿では、『撰集抄』の側から『遊心集』について考えたい。その結果を見て、『撰集抄』を読むに適当な視点を改めて定め、巻二―一話「一和僧都春日託宣」の読解を試みたい。⁽¹⁾

一

『撰集抄』は、引用の和歌、經文、短詞句、小挿話などにも出典名を記しているが、『遊心集』⁽²⁾という書名は、四箇所とも説話部の典拠として名が出ていると読み取ることができる。他に、説話部の出典としてどのような書名があげられているだろうか。

『撰集抄』は臚化した記述をしているので、出典の如く記された書名でも、果たして説話部全体の典拠であるのか、説話の一部の出典であるのか、評論部の内容をも含むものか、判然としないところがある。説話の典拠であるのか詞句の出典であるのか紛らわしい例もある。『撰集抄』のあげる説話部の出典の書名は、『遊心集』の他確かなところで

は左のようになった。

江帥の往生伝（卷一—三話）、拾遺抄（卷六—十話）、拾遺伝（卷七—三話）、高僧伝（卷九—六話）

岩波文庫『撰集抄』書名索引には二十三の書名が記されるが、説話部分の典拠に限ると『遊心集』の他では右の四例⁽³⁾である。

さて、往生伝、拾遺抄、拾遺伝、高僧伝、これらの単語を抜き出してみると、固有名詞ではなく普通名詞ではないかと疑問が生じる。固有名詞と普通名詞の区別について『日本文法事典』（有精堂）は「かなり便宜的な面がみられる。また、場合によっては、一方から他方へ転換することもあり得る」（151頁）と言い、「普通名詞とは、同じ性質を有する事物を一まとめにして名づけたことば」「固有名詞は、同じ類の中の特定の事物を他と区別して示すことば」と説明する。『国語学研究事典』では「普通名詞は事物の属性を表現し、それを通じて事物を指し示すのに対して、固有名詞は事物の属性を表わすことはなく、単に個物に直結している」（130頁）と説明している。

先の四語を検討してみよう。

往生伝という語は、「主に阿彌陀や彌勒の信仰によって往生した人について、略歴、信仰生活、臨終の様子や瑞相のことを記し、編集したものの総称」（『日本国語大辞典』）であるから、普通名詞である。

高僧伝という語は、「名僧、学僧の伝記を編んだ書」（『日本国語大辞典』）の意味ならば、普通名詞となる。

拾遺抄という語は、二つの普通名詞「拾遺」と「抄」の複合語で、普通名詞と考えられる。『国書総目録』には、『往生論註拾遺鈔』『麗氣記拾遺鈔』他の『——拾遺抄（鈔）』という書名、『拾遺歌苑抄』『拾遺古今和歌抄』他の『拾遺——抄』という書名が見られる。何の「拾遺」か、「拾遺」の意味また「抄」の意味如何によって、拾遺抄という語の意味は変わるものと思われる。

拾遺伝という語は、容易に用例を見出せない。先の三語は辞書の見出し語となっているが、拾遺伝は辞書に載らない。拾遺往生伝の略称、あるいは別称として普通に用いられたものか、確証を得ていない。⁽⁴⁾ 拾遺抄のように、その名を題名とする作品が知られていないようである。語構成を見ると、「拾遺」という語を共通の構成要素とする点では拾遺抄という語に対応し、「伝」という語を共通してもつところは、往生伝、高僧伝という語に対応している。「拾遺」および「伝」という語は普通名詞であるから、「拾遺伝」を普通名詞と見ることを妨げる理由はないであろう。『拾遺古徳伝』という書物は存在する。

このように、往生伝、高僧伝、拾遺抄、拾遺伝の四語は普通名詞と見ることのできる語であった。

同じ単語が、『撰集抄』内では固有名詞として使用され、出典の書名となる。

卷一―三話のように「江帥の」と限定されると、往生伝は『続本朝往生伝』のことであろう。

限定がなくとも、固有名詞としての拾遺抄は、藤原公任撰の歌集を指す。また『紫式部日記』では、拾遺抄に『拾遺集』（拾遺和歌集）が比定されている（新日本古典文学大系二四二八頁）。

『拾遺抄』は、今日では「拾遺和歌集」の母胎となった」（日本国語大辞典）ことが判明している。書名の意味は、『拾遺抄』とは「遺された歌を拾い」取り、写録するの謂であり、『拾遺』という語と『抄』という語は緊密につながっていたのである」（片桐洋一『拾遺抄―校本と研究―』159頁）と説明されている。

しかし『袋草紙』上巻には「拾遺集の後は抄有り。集中の妙詞か」（新日本古典文学大系二九六七頁）という記述がある。この記述は、『拾遺抄』が後出で、『拾遺和歌集』から秀歌を抄録したとの認識を示している。この例に窺われるように「中古・中世以来『拾遺和歌集』を抄出して『拾遺抄』が成立したという説が主流を占めてきた」（日本古典文学大辞典）。『拾遺抄』を上記のように考えていた時代には、拾遺抄という語に『拾遺和歌集』の抄出という意

味が生きていて、『抄』は、『抄出』の意だから『拾遺抄』は『拾遺集』より後から出来たものだ」(片桐洋一前掲書148頁)ととらえられていた。

書名の意味は、右のように二様に考えられる。その理由は、多義性をもつ普通名詞「拾遺抄」を書名に宛てているからであろう。更に他の意味で、『拾遺抄』を題名とする書物があるかもしれない。⁽⁶⁾読者は、『撰集抄』成立時の読者であっても現代の読者同様、未知の『拾遺抄』の存在を否定し去ることはできない。

拾遺伝は、巻七―三話の文脈から『拾遺往生伝』が連想される。

固有名詞としての高僧伝ならば、梁『高僧伝』をいう。

ところが、固有名詞としての往生伝(統本朝往生伝)、拾遺抄(拾遺抄・拾遺和歌集)、拾遺伝(拾遺往生伝)、高僧伝(梁高僧伝)には、出典として掲載するはずの説話を載せていない。現在に伝わる諸本に拠ることではあるが、四例全て例外なく載せているべき説話を欠くので、これを偶然と見ることは難しい。『撰集抄』が説話部の出典としてあげる書名の如き言葉は、典拠たるべき書物を想起させはするが、その書物には拠るべき説話を載せていない。作者が言葉を選んで、こうなるように企てたのではないだろうか。

そう思われるふしがある。

巻九―六話を見よう。『撰集抄』は、巻九―六話の道希法師説話を「高僧伝」に見たと書く。しかし、道希法師伝は、梁『高僧伝』ではなく『大唐西域求法高僧伝』に載せる。『高僧伝』(梁高僧伝)は、梁の慧皎撰で五一九年の成立。『大唐西域求法高僧伝』は、「唐僧義浄が自分と前後して東南アジアやインドへ、仏教研究のために留学した僧侶たちの伝記を集めたもので」(天理図書館善本叢書漢籍之部第五巻 解題13頁)、成立は六九一年とされている。道希法師伝が『高僧伝』(梁高僧伝)に収載されるはずはない。それにもかかわらず、『撰集抄』は「高僧伝」と書く。

その理由を、『撰集抄』の言葉遣いに求めたい。卷九十一話に「『高僧伝』どものむかしの跡をきく中にも」(5196-5197行)と、高僧伝という語を普通名詞本来の用法で使った例がある。一方、『閑居友』卷上第一〇話には、高僧伝という語を梁高僧伝の意で用いている箇所があるから、『撰集抄』作者は固有名詞としての「高僧伝」を知っていたことと思われる。『撰集抄』卷九一六話では、説話の出典として名をあげられているので固有名詞であるはずの高僧伝という語を、意味上普通名詞として用いたと見ることが出来る。『大唐西域求法高僧伝』は、高僧伝の一種ではあるので、必ずしも間違った記述とは言えない。

「高僧伝」に関して、読者は『撰集抄』の記述を誤りと断じ去ることができない。『撰集抄』は、高僧伝という語が普通名詞でも固有名詞でもありうることを、意識して利用しているように思われる。翻って、「拾遺抄」の場合を見直してみよう。読者は、未知の『拾遺抄』の存在を否定しきることができなかった。従ってこの場合もまた、『撰集抄』の記述を誤りと断じ去ることができない。逆に作者は、このような言葉遣いによって、『高僧伝』『拾遺抄』に典拠となる語を載せていなくても、両書を出典として掲げうる。言葉の使い方によって、典拠となる語を載せない書物の名であっても出典名として記述できるということは、重要で見逃すことはできない。作者が言葉を選んで、こうなるように企てたのではないだろうか。

そう思われるふしがある。それは、卷一三話及び卷六一十話に出典名を記した後、「見およばざるには非(あら)ず」(169行)(3172-3173行)の一文を、ことさらに付加していることにも認められる。

卷一三話「無縁僧帷返」を例に述べよう。

「見およばざるには非ず」(169行)。この文は、「見およばず」(江帥の往生伝へ『続本朝往生伝』に卷一三話説話部の典拠は、無い)という読者の反論を、作者が予想していることを示している。

「江帥の往生伝」に卷一―三話説話部の典拠となる話を掲載していて衆目に明らかなものなら、ここで「見およばざるには非ず」という言い方で、典拠たる説話の存在を念押しする必要があるだろうか。その必要があるとは思わない。作者が錯誤や混乱をきたしていると仮定しても、その場合は「江帥の往生伝に典拠となる話が在る」と誤ったまま思い込み、「在る」ことを疑っていないのだから、この文によってわざわざ繰り返し典拠の存在を確認しないであらう。この文は、『続本朝往生伝』に典拠となる話が在っては、発想されない。

「見およばざるには非ず」は、述部が二重否定だから意味は肯定となり、「見およぶ」、即ちこの一文は明示的には「江帥の往生伝に卷一―三話説話部の典拠となる話は在る」と言って、読者の反論を制している。こうして「江帥の往生伝（『続本朝往生伝』）」を知っている読者に対処し、また同時に、『続本朝往生伝』を知らない読者には、この一文による不必要な念押しによって逆に疑いを喚起して、「江帥の往生伝に典拠となる話が無い」ことを示唆している。文末の二重否定表現に、作者の思わせ振りが表れている。

この一文は、「江帥の往生伝に卷一―三話説話部の典拠となる話は無い」と副示的に明かしている。

作者は『続本朝往生伝』を知っていて、卷一―三話説話部の典拠となるような話は無いと分かっているのに、「見およばざるには非ず」の一文を付加したと思われる。

読者としては、なお別の、典拠たるべき説話を載せる「江帥の往生伝」が存在するのではないかと疑うこともできる。しかし、読者にこの疑問を感じさせ、『撰集抄』の記述を誤りと断じ去ることができないようにすることが、作者の意図するところ、『続本朝往生伝』と端的に書かなかつた理由である。「高僧伝」「拾遺抄」の例と同じく、読者は「江帥の往生伝」という書名を誤りと断じ去ることはできない。典拠たるべき話を載せない書物の名であっても、普通名詞と見ることのできる語を使って出典の書名として記すならば、読者に誤りと断じ去られることはない。この

ことに作者は気がついて、意識的に使っているように思われる。

卷六―十話「拾遺抄」の場合も同様に考えられる。

卷七―三話の「拾遺伝」が「拾遺往生伝」と書かれなかった理由も、同様の意図によると考えられる。

いかにも書名らしい「言葉」は記してあるが、説話部の実際の出典名を読者に知らせる意志を、『撰集抄』に認められない。明らかに頼晦している。そのやり方は、普通名詞と固有名詞が容易に転換することを利用して、作品の外では普通名詞でもありうる語を、『撰集抄』内で固有名詞として用いる方法であつた。わずか四例から見出した法則性ではあるが、意識的に用いられた技巧であることは、跋に、出典名の場合とは逆に、『撰集抄』の外では固有名詞でもある「閑居友」という語を普通名詞として用いていることから確認できる。

さていまは、本文の明示的意味を尊重して読んでいくこととしたい。読者は、各説話の典拠たる話を具備する「江帥の往生伝」、「拾遺抄」、「拾遺伝」、「高僧伝」は存在するとして読んでいかなければならない。しかし実際は、そのような書物は現在に伝存しないし、述べてきた如く、歴史的にも存在していなかったと考えられる。そこで、可能な読み方は、虚構世界にならばそのような書物は存在する、との読み方である。『撰集抄』の記す出典名は、虚構世界の書名、架空の書名である。現実世界にこれらの書名の指示対象は存在しない。

『遊心集』という語も、説話の出典名として、往生伝、拾遺抄、拾遺伝、高僧伝という語と同様に用いられているはずである。『遊心集』以外の出典名が、虚構世界の書名、架空の書名であるから、『遊心集』もまた架空の書名と考えられる。この語の指示対象は現実世界に存在しない。

以上述べてきたように、『撰集抄』の側から見ると、説話部の出典として名の出ている『遊心集』という書物は、当初から現実世界には存在しなかった、という見通しになる。

二

訓点資料に見られる朱引は、固有名詞の識別意識を現している。

『撰集抄』作者は、言葉そのものに対して関心の深い、言語の観察者であるように思われる。『撰集抄』には、作者の言語感覚で興味ある言語現象を見せていると捉えた言葉を、作者の流儀の機知をもって作品に応用している、ということがありはしないだろうか。

文学作品を分類する時、主題（テーマ）が「内容志向」であるか「表現志向」であるかによって分ける考え方が⁽¹⁾ある。「内容志向」の作品とは、作者の志向が現実、即ち人生に向けられた作品。「表現志向」の作品とは、作者の志向が、芸術的創造の手段そのものに向けられた作品と考えられている。

『撰集抄』を「表現志向」の作品と考える必要はないだろうか。文学作品にとって創造の手段そのものといえ、言葉をおいて他にない。「一」に見たように、出典として注記されている書名の選択に法則性が認められたのは、『撰集抄』が表現志向の作品で、作者の志向が言語そのものに向けられていることの証左と思われる。

『撰集抄』を、表現志向の主題をもつ作品と見る立場で、巻二―一話を読んでみたい。

三

『撰集抄』巻二―一話の一和僧都説話は、『春日権現験記絵』詞書巻八「壹和僧都事」とほぼ同文的に類似する。従来から、『撰集抄』と『春日権現験記絵』（以後、『験記』と略称する）詞書との類似関連については、度々言及

されてきた。⁽⁸⁾ 既に指摘されている箇所に一―二を加え、両書の類似関連箇所を纏めると、

① 『験記』 卷一「序」

『撰集抄』 卷七―十三話 鹿嶋明神事

卷九―一話 内侍所御事并鹿嶋御事

② 『験記』 卷四 永久春日詣時神託事

『撰集抄』 卷六―六話 富家殿事春日御託宣

③ 『験記』 卷七 經通卿事 開蓮房夢事

『撰集抄』 卷五―九話 真範僧正事

④ 『験記』 卷八 壹和僧都事

『撰集抄』 卷二―一話 一和僧都春日託宣

⑤ 『験記』 卷八 離寺僧蒙神託事

『撰集抄』 卷九―十一話 覚英僧都事

⑥ 『験記』 卷九 祈親持經事

『撰集抄』 卷七―四話 中算事

⑦ 『験記』 卷十 林懷僧都事

卷十五 唐院得業事

『撰集抄』 卷六―三話 林懷僧都

⑧ 『験記』 卷十二 恩覚事

『撰集抄』卷七―三話 相模国大庭僧事

⑨ 『験記』卷十六 解脱上人事

『撰集抄』卷九―六話 道希法師事

⑩ 『験記』卷二十 嘉元神火事

『撰集抄』卷五―二話 近宗発心依妻女嘯

以上に加え、

・『撰集抄』慶祚説話についての覚書―密航僧戒覚の伝聞の流传と再生―(木下資一 富山大学 国語教育第八号 昭和五十八年十一月)は、『撰集抄』卷四―八話「慶祚事三井寺」に明恵説話の翻案の可能性を指摘している。『験記』卷十七・十八は「明恵上人事」であるから、関連を考慮してよいかもしれない。

前記①―⑩、両書の結びつきを示す度合いはさまざまで、一説話全て両書ほぼ共通の文辞を持つ例、短い一詞句のみ一致を見る場合、類似話(語句)の連想を誘われる程度、などである。

緩やかな関連の例を多く含むが、『撰集抄』と『験記』詞書との類似関連箇所は少ないとはいえない数であること、また両書ともに全巻に亘るといってよい程偏りなく類似関連箇所が見られることに注意しておく。

『撰集抄』卷二―一話の一和僧都説話は、「細かい文飾による、いわば扮飾を取り払って、話の本質を取り出してみれば、これは春日明神による現世利益の話に過ぎないのではないか。『春日権現験記』にこそ相應しい話であるが、『撰集抄』にとって相應しい話とは思えないのである」(小島孝之 『撰集抄』神明説話考) 説話論集第七集 一九七七年 416頁)と見られている。小島氏は、続けて卷二―一話評論部の最末尾四文を引用され「おそらくこの評語を付すことによって初めて、この話は『撰集抄』の説話として位置づけられることになったのではあるまいか。し

かし、この評語が冒頭の一文にのみ基づくものであって、説話それじしんの内容とは全く触れ合うところがないという点にこそ、大きな意味が隠されているのではなからうか」と述べておられる。

さて、同文的類話といえる『撰集抄』巻二―一話の一和僧都説話と『験記』巻八「壹和僧都事」との僅かの違いの主たる部分は、

a 『撰集抄』の方に維摩会を説明する美文がある。

b 『撰集抄』には、『験記』にある「和光同塵く愛子のごとし」の一文が無い。

c 『撰集抄』は、春日託宣の予言が当たったことを説話部に書いていない（『験記』は、「その、ち次のとしの講師をとけて四人の次第あたかも神託にたかはさりけりとなん」と、春日託宣の当たったことを明文化している）。

一和僧都説話の類話は、『雑談集』巻十（中世の文学 311頁）、『元亨釈書』巻四（大日本仏教全書六二―89頁）、『二会定一記』表紙裏書（大日本仏教全書四九 205頁）に見られ、どれも春日託宣の当たったことを言葉にして記している。類話も含め一和僧都説話という話は、春日託宣の予言が当たったことへの驚嘆と賛嘆とを動機に成ったものと思われる。『撰集抄』のみ春日託宣の当たったことを明文化していないのは、特異なことではなからうか。

c に注目しよう。

『撰集抄』は、説話部に春日託宣の予言が当たったことを書いてはいない。それにもかかわらず、評論部では当たったことを当然の前提としている。そのため、読者は巻二―一話の説話部を託宣の当たったことを書いてある話のごとく了解してしまう。

これは、『撰集抄』が下記のような操作を『験記』の壹和僧都説話に加えているためとは考えられないだろうか。つまり、作者は『験記』の文章を使うが、その眼目たる託宣の当たったことを述べる部分は削除して、なおかつ春

日託宣の当たったことを読者に解からしめる、という作業をこの巻二一話で行なった」と。託宣の当たったことを読者に了解させているのは、評論部である。作者は、託宣の当たったことを前提する言葉を評論部に並べることによる、説話部に明文化されているのでもない託宣の当たったことを、書いてあったかのように読ませている。

評論部を読んでいこう。

*：急雨はる、秋の野原の心地して：（517～518行）

*此事書を見侍りしに、そゝろに涙落て侍き（519～520行）

*「汝は更情無我を捨といへども、我は汝をすてずして、是まで示す也」と御託宣の侍りける。承るに、そゝろに袂のしほりあへず侍る（523～526行）

*：尺迦大師のなき跡の衆生をすくひ給はんとて、神と現給て、いまも彼一和を利し給にこそ（531～533行）
読者は、右の箇所を読み進むうちに、予言は当たったものと思い込んでしまうようになる。

作者は、託宣の当たったことを前提にすれば、右*印の詞句を書き記すことができる。巻二一話評論部の真の役割は、託宣の予言が当たったことを前提する文をここに配することにあつた、と解せられる。『撰集抄』は『験記』巻八「壹和僧都事」の文章から春日託宣の当たったことを述べる一文を削除して自作に用い、なおかつ当たったと判るよう評論部に技巧を用いている。

先に「二」で、『撰集抄』は、作者の言語感覚が捉えた興味ある言語現象を、作者の流儀の機知で作品に応用しているのではないか、ということを示した。「それと書かずとも、書いたごとくに読ませうる」ということも、作者が捉えた興味ある言語現象だったのではないか。巻二一話は、このことを作品に反映させ、言語の運用の仕方実践を試みたと見ることができる。

『撰集抄』を「表現志向」の作品と捉え、巻二―一話を右のように読解すると、評論部は説話部に対応し、一話として纏まっていることが明らかになる。

このように巻二―一話を読み取るに際し、『撰集抄』が『験記』詞書の文章を使い、それに操作を加えたと想定した。『撰集抄』の方が『験記』の文章を使った、と考える理由を『撰集抄』序に照らして説明したい。

「三」の冒頭に『験記』と『撰集抄』との類似関連箇所を列記したが、その八番目は両書が同一詞句をもつ例である。

『験記』巻十二 恩覚事

「…臨終正念にして音楽空にきこえ異香室にみちて上生の望をとけにけり」(続日本の絵巻十三 81頁)

『撰集抄』巻七―三話 相模国大庭僧事

「音楽空にきこえ、異香室にみちて、往生し給へりと、伝には載て侍り」(3425―3426行)

往生人の臨終の際現れる瑞相を記述する言葉を他書に探したところ、類似表現は見られたが、右のように単語の一幕まで同じくする例を見出すことはできなかった。

『撰集抄』巻七―三話と『験記』巻十二に同一に見られる瑞相記述は、『撰集抄』と『験記』とに他にも類似関連箇所があることから、偶然の一致とは考えられない。だが、『撰集抄』巻七―三話「相模国大庭僧事」と『験記』巻十二「恩覚事」は別々の説話であって、内容上、同一の瑞相記述を付加する必然があるとも思われない。短く、類型的な瑞相記述に何故このような一致が見られるのかと考えるうち、『撰集抄』序の「新旧の賢跡を撰求けることの葉を書集め」(7―8行)という句に思い至った。

この句を含む一文を左に抜き書きしよう。

「しかれば、同夢のうちの遊にも、新旧の賢跡を撰求けることの葉を書集め、『撰集抄』と名て、座の右に置いて、一筋に知識に憑申むと也」

この一文は、例えば『沙石集』序の「此故ニ、老ノ眠ヲサマシ、徒ラナル手スサミニ、見シ事聞シ事、思ヒイダスニ随テ、難波江ノヨシアシヲモ撰ズ、藻塩草手ニ任セテ、書キ集侍リ」（日本古典文学大系八五 57頁）と比べると、解かりにくく思われる。「新旧の賢跡を撰求けることの葉」という箇所は、この一文の重要部分と思われるが、最も解かりにくい箇所ではないだろうか。出典の書名の記し方に韜晦の姿勢が認められたように、この部分の解かり難さに作意が感じられる。

一体、説話集が準備される時、『沙石集』の「見シ事聞シ事」という例に見られるように、「事」を集めたという作品が多いようである（日本霊異記・発心集・古今著聞集）。他に「物語」（宇治拾遺物語・続古事談）、「実のためし」（十訓抄）、「実録」（古今著聞集）という例もある。比較するに『撰集抄』は、修飾語を付してはいるものの「ことの葉」を書き集めたと言っているところに特色が認められる。

右に加えて、先に見た『撰集抄』巻七―三話と『験記』巻十二とに同一詞句が見られることを勘案すると、『撰集抄』には、「見シ事聞シ事」「物語」他の「言葉から成る『事』」ではなく、特に「『ことの葉』そのもの」を採ったのだ、という意識が窺われる。

『撰集抄』は、『験記』他の先行書を選び、その「ことの葉」を求めて、自らの作品に書きつけた、と序に明かしているように思われる。

『撰集抄』序の記述を右のように理解し、『撰集抄』の方が『験記』の文章（ことの葉）を使つたと想定した。⁽⁹⁾

まとめ

『閑居友』と『撰集抄』は、所載説話の典拠として『遊心集』という書名を共通してあげている。『撰集抄』の側から考察すると、『遊心集』は、当初から現実世界に存在しなかった架空の書名である、という見通しを得た。『撰集抄』が説話部の典拠としてあげる『遊心集』以外の書名は、固有名詞と普通名詞が容易に転換することに目をつけて選択された「言葉」であった。

『撰集抄』には、言葉そのものへの関心が認められる。『撰集抄』を「表現志向」の主題（テーマ）をもつ作品と考えてみる必要はないだろうか。「表現志向」の作品とは、「内容志向」の作品では、作者の志向が現実、即ち人生に向けられているのに対して、作者の志向が芸術的創造の手段そのものの、即ち言語に向けられた作品のことである。

『撰集抄』を「表現志向」の主題をもつ作品と見る立場で、巻二―一話の読解を試みた。

当該話は、『春日権現験記絵』詞書巻八「壹和僧都事」の文章を用い、そこから春日託宣の予言が当たったことを述べる一文を削除して、なおかつ読者に春日託宣は当たったと判るように、評論部に技巧を用いている。説話部と評論部は連繋して、「書かずとも、書いたごとくに読ませうる」ということを、言語の運用の仕方で実践している。

『撰集抄』を「表現志向」の主題をもつ作品と見ることは、作品を十全に理解するために有効であるように思われる。

注

- (1) 『撰集抄』本文は、古典文庫『撰集抄』上下（現代思潮社）、行数番号は、『撰集抄―松平文庫本―』（笠間書院）による。

- (2) 了俊本『撰集抄』巻二一話は、「遊集」とする（冷泉家時雨亭叢書第二期『源家長日記 いはでしのぶ 撰集抄』朝日新聞社平成九年）。
- 『国朝書目』巻之下には、「近代秀歌」と「拾遺鈔 拾遺集歌五百八十首花山院一説公任卿二十巻」とに挟まれて、「遊心集」の名が見える（寛政三年刊本）。
- (3) 『撰集抄 校本篇』掲載の五伝本には、往生伝、拾遺抄、拾遺伝、高僧伝の四語に異文は見えない。大林院本は、巻七一三話の拾遺伝を拾遺集とし、「集」字の右に「伝イ」と注記する（『撰集抄 大林院本・小林本』278頁）。
- (4) 日本思想大系7『往生伝 法華験記』諸本解題（771頁）は、拾遺往生伝宝生院（真福寺）蔵本上巻表紙に「往生伝為康」と小字で記してあることを報じている。略称の一例といえようか。別称としては、『群書解題』第四上に「日本拾遺往生伝ともいう（56頁）」と書いている。
- (5) 『国書総目録』には「拾遺伝」という書物の記載がある。『国書総目録』の拠る『浄土宗西山派学匠著述目録』（昭和十二年）には、「拾遺伝」の著者妙空弁才の寂年を二四八四年（11頁）と記している。
- (6) 成立年代は不明ながら、事実、『国書総目録』には他の『拾遺鈔』が記載されている。和歌・注釈と類別されているこの書は、『国書総目録』の記述によると『拾遺抄物』のことと判断される。『拾遺抄物』（未刊国文古注釈大系六）には、巻六一十話説話部の典拠と見られるような記事を見出しえなかった。
- (7) 文学テクストの「テーマ」と「詩的世界」上下（北岡誠司訳 A・K・ジョルコフスキー、J・K・シチエグロフ 文学 VOL.4 7 一九七九年五月六月）
- (8) 『撰集抄』と『春日権現験記絵』詞書との類似関連箇所は、左のご論考の指摘に一二を加えて纏めた。
 - ・ 撰集抄試論（平井卓郎 国語と国文学 十八巻十号 昭和十六年十月）
 - ・ 春日権現験記絵詞の底本に就いて（高橋貞一 国文学言語と文芸 昭和三十四年十一月）
 - ・ 『撰集抄』の基調音（高木豊 『芳賀幸四郎先生古希記念 日本文化史研究』 昭和五五年 五月 笠間書院）
 - ・ 『日本の美術』No.203 春日権現験記絵（宮次男 昭和五八年四月）
 - ・ 『春日権現験記絵』詞書考——春日明神靈験譚の集成——（高木豊 『哲学と宗教』 江川忠編 昭和五八年）
 - ・ 『撰集抄』における興福寺関係話の吟味——成立論への一階梯として——（小川豊生 大分工業高等学校研究報告21 昭和

六十年一月)

- ・『春日権現験記絵』と『撰集抄』(高木豊 神道大系 神社編 十二月報 48 昭和六十年三月)
- ・春日権現験記絵(高木豊 国文学解釈と鑑賞 昭和六十二年九月)
- ・撰集抄―現世と来世をつなぐもの(山口眞琴 岩波講座 日本文学と仏教 第三卷 現世と来世 平成六年三月)
- ・『説話文学の研究 撰集抄・唐物語・沙石集』(安田孝子 和泉書院 平成九年二月)
- ・『撰集抄』神明説話考(小島孝之『説話論集 第七集 中世説話文学の世界』平成九年十月)
- ・『撰集抄』(桜楓社)
- ・『撰集抄』上下(現代思潮社)
- ・『撰集抄注釈』(撰集抄研究会)

(9)

『春日権現験記絵』詞書にほぼ同文で、『験記』卷十七・十八詞書相当部分を欠く伝本として、『漸入仏道集』(仏教文学研究二 昭和三十九年二月)と『春日御流記』(大日本仏教全書八四)が知られている。『験記』詞書には、白色色料による訂正があり、この二書は訂正前の本文をもつことで注目されるが、『験記』『漸入仏道集』『春日御流記』三書の成立の上限を示す年代は、三書同じく嘉元二(一二三〇四)年である。『撰集抄』と類似関連する箇所、白色色料による訂正は問題として関わってこない。

本稿「三」冒頭に列記した『撰集抄』と『験記』詞書との類似関連箇所⑧の瑞相記述につき、『漸入仏道集』と『春日御流記』の本文を見ておくと、『漸入仏道集』音楽空二聞へ、異香室ニ満テ(347頁)、『春日御流記』音楽雲ニニコへ。異香室ニミチテ(377頁)、『撰集抄』略本には、音楽を妓楽、異香を靈香とするもの(嵯峨本 古典文庫269頁)がある。広本では、橋本本・松平本・書陵部本が表記まで『験記』に一致。他本は単語を同じくする。一和僧都説話についても、『撰集抄』(松平本)と『験記』『漸入仏道集』『春日御流記』の本文を比較したが、四書は同文的であるため、『撰集抄』に一番似る本文を見極めるのは困難であった。『撰集抄』の参照資料を取って絞るならば、明恵説話も含むことから、『験記』が相応しいと判断した。

だが何人であれ、春日社に奉納された絵巻を机辺に置いて作話の資料にできるとは思われない。また、絵巻というものは、披見作業が大がかりになるはずで、作話の資料には向かない。『漸入仏道集』『春日御流記』の他に、『験記』詞書のみ書物として、『実隆公記』延徳二(一四九〇)年七月廿五日の記事に『春日靈験絵詞自西園寺進上云々』(続群書類従完成会 卷二下447頁)と見え、『春日靈験絵在春日社』(445頁)とは区別されている。絵巻とは別に詞書のみ書物の伝存が知られる。このような絵詞(を

書写したもの）が、『撰集抄』の資料でありえた可能性はないのであろうか。

『験記』詞書の成立に関して、最近興味深い研究が続いて発表されている。

- ・『験記』詞書の成立に関して、最近興味深い研究が続いて発表されている。
- ・『春日権現験記絵』成立と解脫房貞慶（近本謙介 中世文学 第四三号 一九九八年五月）
- ・『絵巻を読む歩く「春日験記絵」と中世』（五味文彦 淡交社 一九九八年十一月）
- ・『春日権現験記絵』と村上源氏（野村卓美 国語国文 第七七九号 平成十一年七月）
- ・『春日権現験記絵』と丹波入道（野村卓美 国語国文 第七九三号 平成十二年九月）
- ・『験記』の側から見ると『撰集抄』との関係はどのようなのか、研究の今後に注目していきたい。